

# \*フェアトレードな生活\*

—その5—

フェアトレードとは、海外の生産者がつくれたものを公正な価格で買い取り、生産者の自立を図る新しい貿易のカタチ。  
“生活のなかの国際協力”を実践されている方をご紹介します。



眞壁潔（まかべ・きよし）さん 神奈川県平塚市

「最初はピース ウィンズ・ジャパンとの縁があるからと選んだのですが、今では、贈った相手が箱を開けたとき、「ああ、眞壁さんからだ」とわかつてもらえるようになっていると思います。そこから、「あのコーヒーをつくっている東ティモールというの…」と会話も広がっていきます」

サッカーJリーグ・湘南ベルマーレの社長を務める眞壁潔さんが、フェアトレードコーヒーのギフトが会話を生み出していく様子を教えてくれます。仕事柄、贈り物をされることも、受け取ることも多いですが、単なるコーヒーではない、フェアトレードのコーヒーというユニークさが、相手の方との会話を弾ませるというのです。

「『あのコーヒー』というのはフェアトレードのコーヒーで、実はフェアトレードに縁があってなどと話がつながります。産地の東ティモールやグアテマラのことも話題になるし、そうすると、残念なニュースになることが多いこうした国を知つてもらう機会になります」

ご自身は、コーヒーを「大量に飲む」という愛飲家。フェアトレードのコーヒーを知り、「なるほど、そういう商品もあるのか」と試してみたところ、「味もちゃんとしてる」。

今後は、現地の様子や子どもたちがコーヒーを摘んでいる写真を同封したりして、コーヒーとともに「より温かみを感じてもらって、協力しようかなと思う気持ちを広げたい」と、さりげなく、話してくださいました。

PWJでは、オンラインの「ピース ウィンズ・ショップ」などを通じて、フェアトレードに取り組んでいます。  
収益は、PWJの活動に役立てられます。 <http://www.peace-winds.org/shop/>

## 支援地レポート

### 東ティモール

コーヒー生産者組合「カフェ・タマウラウ」の自立支援事業の一環として、公文教育研究会と協力し、女性を対象に、公文式の算数・数学教材を使用した教室を開始しました。これまできちんと教育を受けた機会がなかった彼女たちが、計算力を身につけ、家計を管理することができるようになることをめざします。



### リベリア



ヴォインジャマ国立高等専門学校の再建事業がついに完了しました。普通科12教室とトイレ、教室間を移動するための外廊下、教員用事務所、食堂・台所が完成し、9月の新学期を前にロファ州に引き渡されました。学校では再建された食堂・台所を使って毎日給食が提供され、入学希望者が殺到、教室は超満員となっています。

### スー丹

南部のジョングレイ州で井戸建設などを行っている PWJ の活動は、国連機関や政府をはじめ、地元でも高く評価されています。ジョングレイ州のフィリップ・ソン・リーグ州知事が8月、現地駐在スタッフと面会。「PWJ の活動は州内で最も活動する NGO のなかでも最良のもの」と賞賛し、PWJに対して、感謝状が贈られました。



## ピース ウィンズ・ニュース



—危機続くイラクでの活動—



### 毎日2000人が避難民に

イラク戦争から4年以上がたったもののイラクの情勢に改善がみられない。

首都バグダッドを中心に連日のように爆発事件が発生。多くの住民が身を守るために住み慣れた町や村を離れ、難民や避難民となっている。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の報告によると、イラクを脱出した難民の数は160万人。避難民は220万人。その数は毎月6万人のペースで増加している。

難民増加のため国外への越境は制限され、貧困層の多くがイラク国内で避難。その多くが、イラク国内で比較的治安が落ちている北部の旧クルド人自治区(ドホーク州、アルビル州、スレイマニア州)をめざしている。しかし、3州を統治するクルド地域政府は治安悪化を恐れ、紹介状な

どを持たない避難民の地域内滞在を制限。そのため、イラク中央政府の管轄地域と旧自治区との境界線付近(通称「グリーンライン」)に多くの避難民がとどまり、旧軍事施設やテントで困難な生活を続けている。

南からの避難民流入が止まらないなか、イラクとトルコとの間の緊張も高くなっている。

そのイラク北部に、冬が迫っている。山岳部は雪が降り、気温は零下15度にも下がる。ピース ウィンズ・ジャパン(PWJ)は避難民支援を強化し、越冬支援事業も開始した。一方、化学兵器による攻撃で6000人の市民が犠牲となったハラブジヤの町では、本格的な母子病院の建設を進めている。戦乱に見舞われ続けてきたイラクの人々に、せめて一時の安心と休息を。PWJのイラクでの活動はまもなく13年目に突入する。

peace winds  
JAPAN

支援のプロを、  
世界の現場へ

## 学校改築とともに職業訓練も実施

2007年4月、PWJはグリーンライン上にあるイラク北部ニネベ州ファイダ地区の旧軍事施設に避難する約2000家族を対象に、小中学校の改修・増築と職業訓練、職業訓練修了者への収入向上事業を始めました。

改修・増築した学校は、アラビア語で授業を行う地域で唯一の学校で、クルド語が話せない多くの生徒が集中し、生徒数は前年の230人から1065人に増加。老朽化が激しく、教室も生徒数増加でパンク状態でした。

職業訓練は、避難生活の長期化が懸念されるため開始しました。専門技術を身につけ、雇用のチャンスや収入を高めることを念頭に置いて、建設技術と理容技術の指導をすることにしました。

職業訓練を受けた避難民の間からは、技術を生かして職をみつけた人も始めています。



理容訓練を受ける人たち

## 困窮するゲルデセンキャンプを支援

7月には、170家族がテント生活を送っていたゲルデセン避難民キャンプで支援を始めました。気温が40度にもなる時期で、優先したのは、衛生環境の改善でした。

PWJは、排水システムを整備し、生理用品などの衛生用品セットや水タンク、蚊帳を配布しました。また、避難民流入で負担が増えたゲルデセン村診療所へ6ヶ月分の医薬品を提供しました。

キャンプはかつて農地だったところに開設され、土の上にただテントが張られているだけの状況だったため、雨や冬期の雪が降ると、すぐにぐちゃぐちゃになってしまい状態。冬に備え、PWJは10月から、テントの下にコンクリートの床と保護壁を設置する支援を実施しています。



衛生環境の改善へ排水溝を整備

## 冬を乗り切るため4万リットルの灯油配布

厳しいクルドの冬を乗り切るには灯油は欠かせません。そして灯油は暖房だけでなく調理にも使われます。イラクは産油国ですが、現金収入がなければ、灯油を買う術がありません。PWJは、避難民のなかでもとくに状況が深刻な約200家族に灯油を配布します。

対象は、女性と小さな子どもが居住者の7割近くを占めるゲルデセンキャンプと、デラロックとシェラディザという山岳部

知っていますか？

「ハラブシマ」-ハラブジャの町で多くの無実の住民が化学兵器の犠牲になった悲劇を、原爆の被害を受けたヒロシマの悲劇と重ねて、クルドの人はこう表現します。広島・長崎への原爆投下だけでなく第二次大戦中、日本の多くの都市が爆撃されたことも広く知られています。そして、この言葉には、戦禍から立ち直り、平和主義のもと、経済的な発展を果たした日本への連帯と尊敬の気持ちも込められています。

の2つの村のテントで生活する避難民。

配布量は一家族あたり200リットル。これは平均的な家庭が一冬に必要とする灯油の3分の1の量に相当します。

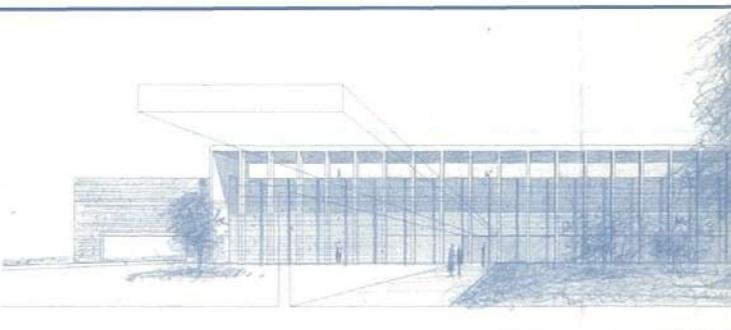
## 悲劇の町ハラブジャに母子病院建設へ

イラク北部クルド地域は、フセイン政権時代、さまざまな弾圧の犠牲になってきました。スレイマニア州のハラブジャの町は1998年3月、イラク軍による化学兵器(サリン、VXなどの混合ガス)の攻撃を受け、8万人の人口のうち、約6000人が死亡し、約2万5000人に重い障害が残りました。この地域では、がんの発生率や障害を持って生まれる子どもの割合が高く、乳幼児死亡率も周辺都市を上回っていて、化学兵器の影響が疑われています。

にもかかわらず、ハラブジャ地域には出産や新生児医療に関する専門の病院がありませんでした。PWJは、母子病院の建設と、医療スタッフへの専門研修を行うことになりました。

建設予定の母子病院は2階建て50床。手術室、分娩室、新生児室、検査室を備え、X線検査も可能です。ナースステーションや食堂、会議室、事務室などのほか、医療スタッフが遠隔地であるハラブジャでも勤務できるよう、職員住宅も完備します。設計は日本人建築士とイラク人建築士による合同デザインとする計画で、協議が重ねられています。

事業期間は2007年8月から09年10月まで。08年3月にも着工予定です。総事業費は約9億円で、日本のNGOによる海外での建設事業としては、これまでにほとんど例のなかった規模となります。



ハラブジャ母子病院の完成イメージ

## 取り残されてしまった人たちとともに

PWJイラク駐在スタッフ 角免昌俊

2007年4月からイラク事業を担当することになり、現地に赴任しました。しかし、治安の関係から、なかなかイラク国内に入ることができず、隣国ヨルダンで調整業務にあたる日も多くなっています。

イラク北部では、インフレが続き、物価の高騰に悩まされています。とくにガソリンはイラク戦争前に比べて、50倍近くにも跳ね上がり、人びとの生活を圧迫しています。

緊急を要する避難民の支援や、開発のギャップのなかで取り残されてしまった人たちの自立支援に、今後も地域の人たちとともに取り組んでいきたいと考えています。

## 村に生きる

イラク

## 自信を失わずグリーンライン上のファイダ地区で避難生活を送る人びと

かつて実質的な休戦ラインがあったニネベ州ファイダ地区の軍事施設が役割を終えたのは2003年のイラク戦争後。その後、イラク情勢が好転しないなか、多くの避難民がこの地に移り住み、避難生活をするようになった。困難な生活のなかでも彼らは、努力することを放棄せず、自分自身と家族のために責任を果たそうとしている。PWJの職業訓練や収入向上事業に加わったのもそのためだ。

モハメドさん(仮名)は2004年、治安が悪化するモスルを離れた。妻と3人の娘とともに、「小部屋」と小さなテントで暮らす。現在はPWJの収入向上事業で小さな商店を営んでいる。

「毎朝、その日払いの仕事を探しにいっても、みつけられるのは10日に1度くらい。残りの日は、ただ、ぶらぶらしているしかなかった。でも今は仕事がある。毎朝、充実した気持ちで起きられる」。小部屋を改修して「家」にすることが今の目標だ。

ヘアドレッサーのコースを受講したサメラさん(仮名)も職業訓練を受けて自信を取り戻した。17人の家族が1つの家で暮らしている。美容院で働くようになり、「収入とともに、充実感を得られるようになった」と話す。

現地の状況は、すべての受講者が職を得られるほど甘くはない。左官工のコースを受講したアリさん(仮名)は、PWJの事業で商店4店舗の建設に携わった後、仕事をみつけられない状態が続いている。「家族を支えるために、仕事をみつけたい」。自分で道を切り開きたいのだ。自分の力を生かして。



左官工の訓練を受ける人たち

## PWJの活動にご協力ください

PWJのイラク支援は、みなさまの寄付・会費のほか、生活協同組合東京マイコープ、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)、国際移住機関(IOM)、国連開発計画(UNDP)などの協力を得て進めています。みなさまのご協力を重ねてお願いします。

詳しくはホームページまたはお電話0120-252-176(通話料無料)で。

### 郵便振替

口座番号: 00160-3-179641

加入者名: ピース ウィンズ・ジャパン

※特定の地域・活動へのご支援の場合は、通信欄に明記してください。

### 銀行口座

銀行名: 三井住友銀行青山支店

口座番号: 普通 1671932

### 口座名義:

特定非営利活動法人ピース ウィンズ・ジャパン広報部

※PWJの活動全般へのご支援とさせていただきます。

### ホームページ

<http://www.peace-winds.org/>

メディア  
掲載報告



気がつけば2007年も残すところ1ヵ月あまり。来年2008年には、1996年に誕生したPWJは満12歳を迎え、年男・年女になります!

この節目に、これまでPWJを支えてくださったみなさまのことをして振り返ってみました。ご支援の記録をみると、設立時からのイラク北部クルド人自治区の支援のほか、2000年のモンゴル雪害支援がきっかけという方がかなりいらっしゃいます。モンゴルは1999年から2年連続して雪害に見舞われ、多くの家畜が死に、農村部の人びとは食べるものにも困る有様でした。報道などで紹介され、日本と同じ東アジアにあるモンゴルの状況に心動かされた方が多かったのでしょうか。

iranでの地震(2003年)や新潟での地震(2004年、2007年)、スマトラ島沖の津波(2004年)などの自然災害をきっかけに行動を起こしてくださった方も多いいらっしゃいます。私たちの住む日本は地震、水害、火山噴火などの災害が多い国、ほかの国々の状況を人ごとに思えないみなさまの心遣いが、ひしひしと伝わってきます。

こうしたみなさま一人一人の思いにより私たちの活動は支えられてきました。その思いを支援の現場に届けるために、私たちは2008年も活動を続けてまいります。今後ともご声援をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。(西川)

支援者サービスの窓